



「イメージ、あるいは連帯の困難さ」

みなさま、はじめまして。2023年の総会において、新たに日本民主法律家協会の理事に就任いたしました、東京南部法律事務所所属の弁護士 坪田と申します。

突然ではありますが、ここ数ヶ月、私の頭を支配しているのは、イスラエルによるパレスチナ人民に対する虐殺についてです。

X (旧Twitter) 上で“Palestine”、あるいは“Israel”といったフレーズで検索をかければ、とりわけガザ地区の老人、大人そして子供が殺害される映像、その亡骸の画像を再生することができ、そして、ガザ地区において繰り返される人類史上においても類を見ない虐殺(ジェノサイド)に対する抗議としての焼身自殺を遂げた米空軍兵の焼身死体や彼が死に至るまでの映像を容易に見ることができます。

イスラエル軍による銃撃や爆撃等によって激しく損壊したパレスチナ人たちの死体、抗議のために自死する米兵の焼身といったイメージ(映像、写真)は、単なる「死」そのもののイメージが持つ意味を越えて、政治的な意味や文脈を携え、とりわけ私のような単純かつ直情的な人間に対しては極めて強烈な印象を残し、そして、極めて単純な「怒り」を駆り立てます。しかしながら、SNS上にアップロードされた写真や映像といったイメージによって駆り立てられた怒りや同情、そしてこれによってもたらされる「連帯」とも表現されることのある主張とは、果たして、そこに動機を求める限りにおいては、語義どおりの強度を持ちうるのか、というのが私の疑問や葛藤の根本にあるものです。

ここで、ひとつのテキストを想起します。それは、フランスの小説家(あるいは犯罪者、あるいは政治活動家)であるジャン・ジュネによって著された『シャティーラの四時間』(鶴飼哲・梅木達郎訳、インスクリプト、2010)です。「シャティーラ」とは、レバノンの西ベイルートにあったパレスチナ人の難民キャンプのことを指します。ジュネは、「サブラ・シャティーラ事件」として知られる、レバノンの親イスラエル政党であるファランヘ党によるパレスチナ難民の大量虐殺事件の現場に臨場し、そこで目にした、パレスチナ人民(であった)の無数の死体やそれを囲むフェダイーン(あるいはフィダーイー、パレスチナ解放闘

士)の様子を、写実的にかつ克明に、というよりは、過剰なまでに文学的に記しています。

そこで、ジュネは「死」そのものをメディアをとおしてイメージすることの困難さについて述べています。

「死体の顔の上に置かれていたハンカチがアラビア語の新聞を持ち上げるだけで、私は蠅の邪魔をしてしまった。この仕草に激昂した蠅たちは、大群をなしてやって来て私の手の甲に止まった。…蠅も、白く濃厚な死の臭気も、写真には捉えられない。一つの死体から他の死体に移るには死体を飛び越えてゆくほかはないが、このことも写真は語らない」

私がジュネの文章によって感じ取るのは、「死体達」や「多くの死体」といった群ではなく、写真や映像に残されなかった、過去にパレスチナ人民であった、あらゆるものから断絶された個々の「死」そのものです。これをジュネは、「死者たちの孤独」と表現しています。生きている私たちが、死者と、ましてや死者の「イメージ」と連帯することは不可能なのです。

「死者たちの孤独、シャティーラ・キャンプではこの孤独が、死者たちの身ぶりや格好が彼ら自身がした覚えのないものだっただけに、いっそう生々しく感じられた。死に様も選べなかった死者たち。遺棄された死者たち。だが、このキャンプの私たちのまわりには、ありとあらゆるいとしさ、優しさ、愛情が、もうそれに応えぬパレスチナ人を求めて漂っていた。」

イメージすることの困難さ、そして連帯することの困難さから始めなければならないという気持ちが私の心を締め付けています(2024年某日、都内某大使館前抗議行動にて)。

(弁護士 坪田 優)

次号予告

「法と民主主義」2024年5月号 (No.588)

【特集】

あらためて問い直す《政治とカネ》
— その理念と改革の方向

● 針生誠吉基金 ●

本誌は、故針生誠吉先生からの多額のご寄付によって、発行を支援していただいております。